

ゆず Plays ヤマハアコースティックギター
in YUZU ARENA TOUR 2008 WONDERFUL WORLD

4月16日に、2年3ヶ月ぶりのオリジナルアルバム「WONDERFUL WORLD」をリリースした、北川悠仁と岩沢厚治のフォークデュオ「ゆず」。「YUZU ARENA TOUR 2008 WONDERFUL WORLD」でツアー中の2人に、ヤマハギターについての質問に答えてもらった。

4 ゆず 岩沢厚治
Questions & Message

Question 1
ヤマハのアコースティックギター「FG」で気に入っている点はどこですか。

Question 2
持っているFGの特徴や音の違いは？

白1 (FG-Custom)：一度ネックが折れるという大けがからみごと復活、にぎりやすく、ストロークからアルペジオまでは幅広く使用。ピックアップは旧型で、シャキッとした音がかこちよいです。

白2 (FG-Custom)：1号機と同じ型の2号機はピックアップをA.R.T.ピックアップに変更、より生に近い音が出る。弦高が低いのでアルペジオや指弾きの時の独特なピリリがよい。割とクリアな音がある。

黒1 (500X)：元々ビエロだけだったピックアップをA.R.T.に変えました。元々鳴っていたLOWがより出るようになった。

うになりました。MIDもこちよいです。元々ブリッジにアジャスターがついていたのですが、これを期に取り外してもらいました。

黒2：ジャカジャカと気持ちのよい音がある。割と出がりが設定で、会場によってはLOWが出なくて苦労する。

Question 3
A.R.T.ピックアップシステムでよくなった点はどこですか。

Question 4
岩沢さんにとって、FGとはどんな存在ですか？

& Message
ギターを愛する読者の方々にメッセージをお願いします。

Question 1
ニュー・アルバム「WONDERFUL WORLD」について教えてください。また、ツアーの見所、力を入れている点は？

Question 2
アコギとはどんな存在ですか？

Question 1
アルバムについて、デビュー11年目を迎え、今までやってきたものは更に強固に大切にしつつも、多くの方との出会いやチャレンジをし、新たなゆずを表現したアルバムです。

Question 2
& Message
ギターを愛する読者の方々にメッセージをお願いします。



Nakata

最後まで「より良くしたい」から、歌を録りながら作曲もアレンジもしています。

- 中田ヤスタカさんのサウンドプロダクションのプロセスを教えてください。
- 他の人と結構違うかも知れませんが、僕は早い段階で歌を録っちゃうんですよ。声を録ってからアレンジを考えたり作曲もします。録りながらアレンジしている感じですかね。だから歌入れてアイデアがわいたら、ボーカリストに待ってもらってアレンジの作業に入ってまた歌入れに戻る、という繰り返し。あまり作り込まない時点で歌を録り始めます。
- オケを作ってから最後に歌を入れる方法だと「一か八か」にしかならないんですよ。最後の歌入れて「あれ、なんか歌えてないな」という時はボーカリストにディレクションしてオケにあわせてもらうしかないじゃないですか。そうじゃなくて、制約好きに歌ってもらった時の感じを生かしてアレンジしていきます。だから、レコーディングに入ったときの音と完成したときの音が全然違う。コード進行も全然変えちゃいます。最初からリミックスされているような空気感ですね。
- 自分で完成は見えないけど作り続けていく？
- これ以上良くするにはどうすればいいんだろうということを、時間がある限り限界まで考えたいんですよ。
- 歌を録ってからどんな曲を変化させていくのは、DAWだからできることですね。
- 最後の最後にAメロをヤメてしまう、というように、構成も最後に考えるのでDAWでないと僕の音楽制作のスタイルは無理です。

Cubase4で、MIDIもオーディオも意識しないで使っています。

- DAWはCubase4をお使いですね。
- 以前はADATだったり、デジタルパフォーマンスだったりしましたが、2002年頃にオールCubase1に移行しました。最初はVSTのソフトシンセが使いたかった、というのが理由ですが、オーディオを扱うのがカンタンになったのもあって。今はMIDIもオーディオも意識しないで使ってます。単純に素材がいっぱい並んでいる感じ。時々間違えるんですけどね(笑)。
- DAWになって制約が無くなった感じはありますか。
- 音で考えたら制約はもうないですね、あとは作り手の感性がどれくらいあるかでしよかね。

『Cubase Essential 4』好評発売中!

Cubase Essential 4は、前モデル「Cubase SE 3」の後継として開発されたCubaseシリーズのエントリー・グレードです。中田ヤスタカ氏も使用されているCubaseシリーズのフラッグシップ・グレードである「Cubase 4」と同様の高音質VST3 オーディオ・エンジンベースとしており、音楽制作用途として必要不可欠な機能に絞らざることをハイコストパフォーマンスを実現しました。ヤマハのハードウェア・シンセサイザ「MOTIF」の波形を採用した音源「HALion One」、オーディオ&MIDIデータ、音源&エフェクト・プリセットなどを一括管理する「メディアベイ」、素早く異なる曲構成を試すことができる「アレンジャートラック」、オーディオファイルのテンポをプロジェクトテンポに自動追従させる「オーディオワープ」などの新機能を多数搭載しています。リーズナブルな価格でCubaseの基本機能をお求め方には是非お勧めしたいソフトウェアです。

steiberg
Creativity First

Cubase Essential 4 通常版
市場実勢価格 ¥25,800 (税込み)
Cubase Essential 4 アカデミック版
市場実勢価格 ¥21,000 (税込み)
Cubase Essential 4 アップグレード版
市場実勢価格 ¥16,800 (税込み)

Cubase Essential 4 製品情報WEBページ
http://www.steinberg.net/1619_0.html

中田ヤスタカが語る、サウンドプロダクションの方法論と、これからのサウンド

プロデュースしている「Perfume」が大ブレイクし、今や日本の音楽シーンで最も注目を集めているプロデューサー／サウンドメーカー、中田ヤスタカ氏。自身のユニット「capsule」では曲作りからアレンジ、ミキシング、マスタリング、さらにジャケットのアートディレクションまでもほぼ一人でこなしてしまう巨大な才能の持ち主だ。音楽制作のすべてを行うというプライベートスタジオで、サウンドメイキングについて、愛用のCUBASE4について、そして音楽制作のコンセプトについてインタビューした。

ピアノの音の強弱を表現するにはMO8のピアノタッチ鍵盤がいい

- スタジオにはMO8とKX61がセットされていますね。
- MO8はピアノタッチ鍵盤として、主にピアノやエレクトリックを弾く時に使ってます。ピアノを弾いていたこともあり、やっぱり実際に重い鍵盤を使った方が強弱が付けやすいですね。軽い鍵盤だと中くらいのうととか、中くらいの下の弾き分けが難しい。KX61はメインで使用しています。いままで49鍵のものをつかっていましたが、少し足りないと感じて、音域が広い鍵盤にしました。PCを操作しながらだと、これくらいの大きさがいいですね。
- 音源はすべてソフトシンセですか？
- そうです。僕はもうソフトシンセの方が音がいいと思っています。それとハードのシンセが部屋があると「そのシンセを使うか」と思うことが自分の縛りになってしまうのがNG。ギター買ったからロックやんかきやけいなみたいな？ ソフトシンセは必要なものが必要なきスツと出てきて、使ったらまたなくなる、という感じが気に入ってます。音源としては割とシンプルなものが好きで、1音でいろんな音が出てエフェクトがついているようなハイブリットなもの僕は要らない。音が一個一個ウサイという感じです。音楽の素材として使いやすい音、曲の中で使える音は結構シンプルなお音なんですよ。



勘違いや偶然から生まれた新しい音やバランスが、いま面白い。

- DAWを駆使することで、自分の部屋で録音、ミックス、マスタリングまで全部できる時代ですが、音楽は変わってきているのでしょうか。
- いまみんなが「プロっぽさ」みたいなものをヤメたがっているんじゃないかと思えます。以前だったらエンジニア的には「失敗」だったのが逆にカッコよかったり。まだ卓でミックスしていた12、3年くらい前までは、みんなが目指す「プロっぽい音」があった。でもPCでミックスまでできるようになると、知識がなかったり、勘違いだったり、偶然そうなっちゃったみたいな音から、新しい音やミックスバランスが生まれてきて、今はそれが面白いと思ってます。でも僕なんておとなしい方だと思いますよ、海外のエレクトロの音なんて、全然歪んでますからね。耳痛いもんね。フィルター上げてレベルが赤くついても、そのままいっちゃえ！みたいな。でもエレキギターのディストーションだって、最初の頃はNGだったのが、だんだんあの歪みがいいということになったじゃないですか、それと同じだと思います。だから僕はデジタルの歪みが好きだし、MP3で圧縮しすぎてシャフワワした音もカッコいいと思っています。そういう時代は絶対来るから。

「ダサイ」と「カッコいい」のギリギリのところをやりたい。

- いまほしい中田さんがほしいシンセはどんなシンセですか？
- デザインがいいシンセですね。音楽をやりたい人の入門用のシンセはあるんですが、音楽に興味のない人が「これカッコいい」って弾きたくなるシンセがない。たとえばiPodがほしい人って「音楽が聴きたい」よりも先に「iPodを持ちたい」というのがあると思うんです。でiPod買ったら音楽も買わなきゃって、それが音楽の売りに貢献している面もある。ハードがソフトを助けてくれるみたいな。同じように作曲家を増やすなら、カッコイイ楽器を作ればいい。「自分の部屋にこういう物を並べたい」というイメージから打ち込みをはじめた人も多いと思うんです。パソコン買ったら買わなきゃって思うくらい、カッコいい鍵盤があっても面白い。すこし高くてもみんな買うかもね。僕がやりましょか(笑)。

BREAKING NEWS

ヤマハ株

あのLシリーズがA.R.E技術で「新品なのにビンテージギター！」

ヤマハアコースティックギターを代表する高級モデルLシリーズの高級手工シリーズの「L36」および「L26」シリーズに、独自の木材改良技術「A.R.E.」を施した素材を用いた「L36ARE」、「L26ARE」の2シリーズが発売。

「A.R.E.」によって、完成後20年から30年ぐらひ弾き込まれたビンテージギターに近い、熟成された暖かみのあるサウンドを実現しています。ギター好きのあなた、高価なビンテージギターに憧れていたあなた、ぜひ楽器店で実際の音をお確かめください。

A.R.E.を施した新しいLシリーズの記者発表には加藤和彦氏も駆けつけ、そのサウンドを絶賛。

WHAT is A·R·E·)))

A.R.E.技術とは何か？

A.R.E. [Acoustic Resonance Enhancement]とは、長年弾き込まれたような豊かな鳴りを再現する木材改質技術。高度に制御された水と熱のみを利用し、木材の物性を音響的に理想的な状態へ「長年使い込まれた楽器の木材の分子構造と同様の状態」へコントロールするものです。掲載のグラフは、現行品LシリーズとA.R.E.搭載のNew Lシリーズを一定の条件下において発音させた、音響スペクトルの実測グラフィックデータ。低域のサステインが増大し、高域のアタック感が良くなっています。またアタックの後、耳障りな高域成分がより短時間で減衰しています。多くのミュージシャンからも「落ち着いた」、「熟成された」、「暖かい」、「箱」のいい」、「音」の粒立ちが良い」といった評価を得ています。

LS36ARE

DE1155 ヤマハ株式会社

ゆずの舞台演出笹川章光氏が語る、ゆずサウンドの秘密

ゆずのライブにおける総責任者である舞台演出の笹川章光氏は、ゆずのライブサウンド作りのキーパーソンである。笹川氏に、ゆずのアコースティックギターのサウンドの秘密と、新開発のA.R.Tピックアップについて語っていただいた。

岩沢君はこよなく愛するFGにA.R.Tというエンジンを載せた。

■笹川さんは、デビューから音の面でゆずを支えていらっしゃるんですが、岩沢さんはどうしてずっとFGを使っているんだと思われませんか？

●岩沢君は最初からヤマハ弾いてましたが、ゆずが最初のツアーをやる頃に「ギターが足りない」という話になって、ガンちゃん(岩沢さん)がウチの事務所に来て。ちょうどそこにヤマハの黒いギターがあって、ガンちゃんは、そのギターですっかりヤマハにのめりこんでいった。出逢っちゃったってことじゃないですかね。それが今、彼が使ってるクロ1というギターです。

■岩沢さんはどのギターでも使える状況だと思いますが、それでもFGなんです。ガンちゃんはそういう人ですね。彼は自分のFGをこよなく愛しているから。今回もギターの音をもっと良くしたい、ということになって、彼は「エンジンを載せ替える」と言っていて、今のFGにA.R.Tを取り付けることにしたんです。新しいギターに乗り換えるんじゃないんですよ。新しいギターにしたら、って言っても、目もくれない。「俺はヤダ」って。あそこまで自分のギターにこだわっている人は珍しいですね。

北川君は今回ヤマハのプロトタイプの赤いアコギを使っています。

■北川さんというピアノカ吹いてる姿が思い浮かびますね。

●北川君はよくピアノカを使います。彼が「スケルトンってない?」って言ったので探したらヤマハにあって、それをもの凄く気に入るようですよ。

●それから今回のツアーで北川は、ヤマハのプロトタイプのアコースティックギターを使っています。赤い色のギターです。ピックアップはA.R.T。それから今回ツアーでは使ってませんが、北川はヤマハの「ドラゴンギター」を持ってましてね。それはジョン・レノンがヤマハで作ったギターのレプリカですが、実は作るにはオノ・ヨーコさ

んの許諾が必要なんです。普通は許可を取るのって難しいんですが、以前ゆずが「Dream Power ジョン・レノン スーパーライブ」に出演したことがあって、その縁でオノ・ヨーコさんに打診したら快諾をいただいて作れることになりました。彼は宝物のように大切にしているようです。

新開発のピックアップシステム「A.R.T」はかなり生っぽい音が出せます。

■「A.R.T」ピックアップについて聞かせてください。

●僕は従来のピエゾ方式のピックアップでもアコースティックギターの80%はOKだと思っています。ただ、あの20%の「生っぽさ」をどう表現するかについて、10年近く試行錯誤してきました。で、あるときヤマハからコンタクトマイク方式の開発の話があって、これはかなり生っぽい音が出せそうということになり、いっしょに研究を始めました。何度もトライしたおかげで、かなり生っぽい、いい音が出せます。

A.R.Tではマイクだけでなく、プリアンプの調整にも時間をかけました。特にアコースティックギターは中域が大事で、いちばん美しい音域であり、難しいところでもあります。そこも含めて音質の精度を高めたことで、PAがほとんど音をいじらなくてもいい状態で「いい音」ができました。いままで我々の課題だった「PAでギターの音が変わる」ということが回避でき、誤差の少ない安定したピックアップシステムに近づけたと思います。

A.R.Tピックアップシステムとは

「Acoustic Resonance Transducer(アコースティック レゾナンス トランスデューサー)」とは新開発の3ウェイピックアップで、独自の積層構造とセッティングとの組み合わせによって高音質な電気増幅機能とハウリング耐性を両立させた画期的なシステム。ブリッジの中央にアコースティックサウンドの基幹部分を担うメインピックアップ、1弦と6弦のそれぞれの裏側周辺に高音域用と低音域用のサブピックアップの計3系統のピックアップを搭載しています。



FG750S ¥54,600(本体価格 ¥52,000)



FG720SL ¥42,000(本体価格 ¥40,000)



FS720S ¥36,750(本体価格 ¥35,000)

「FG/FS トライ&プレイ」キャンペーン(キャンペーン期間:2008年5月3日~2008年7月31日まで) 対象店にてFG/FSシリーズをお買い上げのお客様に、オリジナルヤマハストラップ(タフな3mm厚合皮製)を無料でプレゼント。※数量限定、無くなり次第終了予定。



Akira Jimbo Plays DTXREME III

At 神保彰ワンマンオーケストラ ドラムからくり全国行脚2008

僕とDTXTREME IIIは、もうバンドメンバーみたいな関係です。

1980年カシオペアでプロデビュー以来、四半世紀の長きにわたって常に音楽シーンの最先端を走り続けるトップドラマー、神保彰。

ニュースウィークの特集「世界が尊敬する日本人100人」に選出されるなど名実共に「世界で最も有名な日本人ドラマー/ミュージシャン」である。

ドラムトリガーシステムDTXTREMEIIIによるワンマンオーケストラはまさに神業の域に到達していると言えるだろう。

現在「神保彰ワンマンオーケストラドラムからくり全国行脚2008」と題して80都市82会場を巡るツアー中の神保氏にインタビューした。

ドラム1台でコンサート。もう11年、このスタイルでやっています

■ワンマンオーケストラをはじめたきっかけを教えてください。

●僕はデジタルドラムが出た早い時期からメロディックなアプローチをはじめました。最初はヤマハの電子ドラムのPMC1でした。PMC1には打楽器なのに音階が出てメロディックな実験ができる機能がついていた。で、ドラムソロの中で音階を使ってみたら、もの凄くウケたんです。これはイケル! という単純な発想で始まりました。そこから世代が変わるごとにどんどん機能が強化されて、複雑なことができるようになってきて、このツアーのように2時間のコンサートを僕一人でやるようになったのが1997年からですから、もう11年、このスタイルでやっています。

■ドラマー1人で音楽全部を演奏するのは大変ですよね。

●確かにドラマーとしての力量はもちろん、ある意味アレンジなども含めてプロデューサーとしての視点も必要なので、すこしハードルは高いかもしれません。でも非常にチャレンジしやすいのある未開の分野なので、いろんなドラマーにトライしてもらいたいですね。

僕はこのツアーでカバー曲をたくさんやっているんですが、カバー曲を違った視点で自分なりのアレンジで見せるというのができるようになってきました。曲に対するアレンジ能力とか、自分の曲のアンサンブルの組み立てなんかも格段にスキルアップしたんじゃないかな、と思っています。今回のワンマンオーケストラは、カバーが多いんですよ。60年~80年のロックメドレーや、アース・ウィンド・アンド・ファイヤーのメドレー、ウェザー・リポートのメドレー、それにクラシックのメドレーもあります。いろんなジャンルでいろんな世代の方に楽しんでもらえるような曲をピックアップして、僕なりの「ひねり」を加えたアレンジで聞いていただいています。



神保彰ワンマンオーケストラ ドラムからくり全国行脚2008 ツアースケジュール

6月9日	(月)	〇札幌 ヤマハ フィールズ	6月24日	(火)	三重 MAXA
6月11日	(水)	水戸 Garl Talk	6月25日	(水)	和歌山 OLD TIME
6月12日	(木)	〇横浜 KAMOMIE	6月26日	(木)	〇大阪 knave
6月13日	(金)	ヒダジンボ	6月27日	(金)	〇京都 RAG
6月19日	(木)	富士 KOLN	6月28日	(土)	滋賀 ホテルラフォーレ琵琶湖 デジタルスタードームほたる
6月20日	(金)	〇浜松 Merry You	6月29日	(日)	〇大阪 茨木市 JACK LION
6月21日	(土)	豊橋 HOUSE OF CRAZY	6月30日	(月)	土岐 Brid & Diz
6月22日	(日)	〇名古屋 Bottom Line Japan	7月1日	(火)	甲府 桜産
6月23日	(月)	奈良 BEVERLY HILLS	7月2日	(水)	高崎 Club FLEEZ

〇印の会場ではDTXTREMEの試奏が行えます。

DTXTREMEIIIとの演奏は、一人なのにバンド的。

■やはりワンマンオーケストラのカギはDTXTREMEIIIでしょうか。

●その存在は僕にとって非常に大きいですね。ドラマーが一人で演奏するというのは、ある意味孤独なんです。DTXTREMEIIIとの演奏は、全部の音をパッドを叩いて音を出しているのだから「自動演奏」じゃないんですよ。たとえば自動車で乗るのがシーケンサーやカラオケを使った自動演奏だとすると、DTXTREMEIIIとの演奏は自動演奏のようなもの。自分が何かしないと音楽が動いてくれないんです。

■自転車みたい、というのはオモシロイですね。

●自動演奏じゃないから、いつも同じ演奏にはならないんです。ツアーで何回も同じ曲を演奏しているけどだんだん演奏がこなれていって、これが非常にバンド的なんですよ。一人なのに。アレンジも臨機応変に変わってくる。その日の気分でテンポもかなりかわります。意識的に速くやると面白いと思った時期があったり、遅くやると新鮮だと思った時期があったり、80本のツアーの中でも変化があります。

格段に進化したDTXTREMEIIIでパフォーマンスの制約が無くなった。

■神保さんはDTXTREMEIIIの開発にも深く関わられたそうですね。

●DTXが出てきたあたりから、僕がワンマンオーケストラで演奏している「どうやったらもっと簡単に、一般の方に楽しんでもらえる音楽が演奏できるか」という面から発想して「こんな機能がほしい」と言い続けてきました。今回のDTXTREMEIIIでは現時点でのリクエストは全て実現していただきました。でも「言うは易し」ですからね、開発者の方はかなり苦労されたと思います。

■DTXTREMEIIIではどんな機能が特長ですか格段に進歩したのが、スタック・オルタネイト機能ですね。スタックは和音を出す機能。オルタネイトはプログラムする順番に単音が出てくる機能。前までは「スタックは6音まで、オルタネイトは9音まで」というような機能的な制限があって、それ以上はどうやっても無理でした。それがDTXTREMEIIIからは基本的には無制限にプログラムできます。たとえば極端に言えばベースラインなら1曲分のベースラインもそのまま入れることができるわけですから、今までとは比較できないほど拡張してます。本心に制約がなくなりました。DTXTREMEIIIのプリセットには僕がプロデュースしたキットの音も入ってます。DTXTREMEIIIのプリセットには僕がプロデュースしたキットの音も入ってます。No.9、19、29ですので、ぜひ僕の音を展示会場や展示店で試してみてくださいと思います。



2008年04月01日発売 オープン価格 NEW

DTXTREME III スペシャルセットデビュー!

あのDTXTREMEIIIに、ゴージャスなセッティングの「スペシャルセット」が登場!

DTXTREMEIIIには、世界のトップドラマー・神保彰、トミー・アールドリッジのデモ曲を内蔵し、さらにデイヴ・ウェックル、ジョン・ロビンソン、ラス・ミラーといった錚々たる名ドラマーのドラムソロが収録されています。また、練習曲としてDTXTREMEIIIのリアルな音色を生かしたデータも収録! 4タム/3シンバル/スネア/ハイハット/キックのゴージャスなセッティング。新開発のシンバル、ハイハット、キックは、さらにリアルな演奏感を実現。音源部の能力を最大限に発揮するパッド群と、それらを支えるHEXRACK。飛躍的に向上した機能が、完璧なまでにプレイヤーの感性を表現し、グルーブを生み出します。

ヤマハのドラムは「ハイレスポンス」力量がそのまま音にでるところがいい。

■ヤマハのアコースティックドラムについて、聞かせてください。

●僕はなんといってもスティーブ・ガット世代ですから、学生時代からずっとドラムと言えばヤマハでした。ヤマハドラムは時代を超えたスタンダードだと思います。ヤマハの良さを言葉で言えば「ハイレスポンス」。プレイヤーのプレイアビリティを如実に反映してくれる楽器ですね。誰が叩いても同じ音がするのではなく、叩く人が変わると、音も変わってくる、そこが傑出していると思います。それはシェルの精度、ハードウェアの精度とかが音に反映されている。ヤマハのドラムは非常に繊細に作られているからでしょうね。



■今後のスケジュールを教えてください。

●去年から自分のソロアルバムをはじめました。昨年のアルバム「Four Colors」、今年のアルバム「Get Up! 」は、いずれも同じメンバー。ベースにエイブラハム・ラポリエ、ギターにフランク・キャンベル、ピアノにオトマロ・レイズ。その3人とのコンビネーションが非常に良く、この秋にも、もう一枚レコーディングを予定しています。夏場はもう13年やっている熱帯JAZZ楽団でジャズフェスやアルバム発表ツアーをします。秋はヨーロッパに行ったり。それからカシオペアの野呂さんがソロアルバムを出して、そのレコーディングとライブツアーを手伝ってます。秋にもミニツアーがあるようです。

■最後に読者のみなさんにアドバイスををお願いします。

●音楽は、音を楽しむと書きますよね。特にドラムは生きている喜びとかそういうポジティブなエネルギーを表現できる幸福な楽器だと思っています。ですから技術の向上も大事なんですが、まずは「叩いていて楽しい」という気持ちを大事して、演奏する喜びを感じられる演奏家であってほしいですね。もちろん練習するときはいろんな神経を使って、頭を使って、効率的に練習するべきなのですが、いったん人前で演奏をしたり、みんなで合奏する時はいったんそういうことを忘れてしまって、演奏する場と空気を楽しむ、それを大切にしたいと思います。

